

## 関連学会印象記

## 第25回ヨーロッパ心臓病学会

高木 洋\*

今年のヨーロッパ心臓病学会 (ESC) は、2003年8月30日から9月3日までの5日間にわたり、オーストリアの首都ウィーンで行われた。当学会は今回で第25回目と、奇しくも来年の日本循環制御医学会と同じ開催回数となるが、これは第1回目の1952年から1988年までの期間は4年に1回みの開催であったためであり、その歴史はかなり古い。参加者総数は2万5千人前後と著者らが例年出席する日本循環器学会のほぼ2倍の規模で行われ、ヨーロッパ以外からも多数の参加者がある。最近では、参加者増加のため開催地は限られ、ウィーン、アムステルダム、ストックホルム、ベルリン等の4～5都市の持ち回りで開催され、参加者が多いイタリアでは一度も開催されてない。小生は1997年に初めて参加して以来、ほぼ毎年出席し今回で6回目となった。ウィーンでのESCも2度目となったため、学会規模の大きさ自体には驚かなくなったものの、会場によっては異様な熱気に圧倒される場面もあった。前回同様、ウィーン中心部から3～4kmに位置するメッセツェントルム（見本市会場）というコンベンションセンターが会場となった。ここは、映画「第三の男」で知られるプラター観覧車の遊園地に隣接し、ドナウ河の見物にも歩いていける距離にある。今夏はヨーロッパ全土に熱波が訪れたと報じられていたが、著者らが訪れた時には、既にすっかり秋の様相を呈し極めて快適で、朝晩はむしろ肌寒く感じられた程であった。

本部の発表によると、応募演題数は8753題と過去最高でヨーロッパ諸国からのものが7325題とその84%を占め、ドイツ、イタリア、ポーランド、ギリシャ、イギリス、フランス、スペインの順と

なっていた。ヨーロッパ以外からは1428題が応募されたが、そのうち日本からが430題 (4.9%) と最多であり、米国の300題より多く、全体でもフランスに次いで7位であった。残暑の厳しい日本の気候と比べ、この時期のヨーロッパでの過ごしやすさは格別なものがあり、小生のようなリピーターが多いためかもしれない。研究領域別には、不整脈・Pacing 関連が16%、心不全・心機能が16%、虚血性心疾患が14%、疫学・予防が14%と続く。最近増加していた Basic Science が14%と一時より減少したようであった。採択されたものは2652題で、採択率30.3%と例年の35%前後よりより厳しくなっていた。うち791題が口述、1861題がポスターで発表された。日本からの採択数は110題 (26%) でかなりの難関となったようである。トピック別にみると、欧米での関心が高い “congestive heart failure” が270題と最多であったことは納得できるが、それに次いで “atrial fibrillation” が202題もあり、心房細動に対する病態と治療への関心の高さが伺われた。

毎年感じることであるが、ESCのプログラムは実によく企画され、主催者側が、できるだけ多くの出席者の興味を満足させるように十分に配慮し、毎年のように新企画も設けられている。Symposium, Main Session, Debate ではいずれも出席者の興味を引くようなテーマが採用され、経皮的冠動脈インターベンションなどのライブデモを行う Focus Session では、会場は常に満席で立錫の余地もない。また、昨年新設され、最終日に行われる Highlight session では、8人の講演者が、前日までに発表された基礎・臨床研究をそれぞれ10～15分程度で総括・概説するものであり、今後ESC参加を予定している方にはおすすめしたい。今年新設された Clinical Seminars もかなりの人気

\*国立循環器病センター研究所循環動態機能部

を博していたようである。これらのプログラムが25会場で同時進行した。著者らは自身の発表に追われたこともあり、限られた情報しかお伝えできないが、主な発表内容等を紹介する。

最近のESCでは、AHAと同様にいくつかの大規模臨床試験の成績がHotlineと銘打って発表され、大きな注目を集めている。今回最も注目を集めたものは、アンジオテンシンII受容体遮断薬(ARB)であるカンデサルタンの心不全治療効果を検証したCHARM試験(26カ国が参加)の結果発表であった。本試験は、心不全治療薬として多くの期待を寄せられながらも、それまで必ずしも立証されていなかったARBのいくつかの課題に答えるべくデザインされており、今回新たに、同薬が単剤あるいは従来の心不全治療薬との併用のいずれでも、心不全患者のイベント発生率を低下させることが明らかとなった。患者背景や予後が欧米と大きく異なる本邦の臨床に、この結果をそのまま当てはめることはできないとしても、本剤はACE抑制剤に忍容性のない患者にも使用可能なことが多く、咳や血管浮腫等の副作用が少ない点は臨床家としてはありがたい事実と感じられた。他のHotlineとして、EUROPA(冠動脈疾患例でACE阻害剤が予後を改善)、BASEL(呼吸困難例の心不全鑑別にBNP測定が有効)等が発表され、他にもいくつかの臨床試験のUpdateがなされていた。

【ポスター発表】今回4題のポスター発表を行った。例年感じることであるが、広すぎるためかやや閑散とした印象であった。人だかりがあるようなものはほとんどなく、ESC側もそれを考慮してか、Moderated Posterセッションを新設して盛り上げようとしている努力が感じられた。

【口述発表】興味深かった演題を紹介すると、選択的・特異的なIf(洞房結節ペースメーカー電流)抑制作用により心拍数を低下させるIvabradineという新薬が、抗狭心症作用と抗虚血作用においてAtenololと同等に有効であったという報告が英国のグループからなされた。著者らの臨床では、β遮断剤の使用が困難または不可能な末梢循環障害、閉塞性気道障害、糖尿病などの合併例に遭遇することは稀ではないことから、本剤は近い将来日本でも発売されるかもしれないと感じられた。

心臓リハビリテーション業務に従事している著

者にとって興味深かった演題がドイツのグループから発表された。安定した冠動脈疾患患者に経皮的冠動脈インターベンション(PCI)と運動療法を無作為振り分けしたところ、運動療法群はPCI群に比べて、より大きな運動能改善が得られただけでなく、2年後のイベント発生率が少なかったという。最近では、冠動脈に狭窄があればなるべくPCIで広げようという傾向が一部にあるように思われるが、そのような潮流に一石を投じる知見と思われた。

今回のESCでは、当施設の若い医師2名が各1題、計2題の口述発表の機会を得た。ともに運動負荷に関する演題で、一つは回復期のST slope、一つは陰性U波を指標として、心筋虚血の診断精度をデジタル心電図コンピュータ診断で改善させようというものであった。幸運にも、“Exercise testing: from ST segment to U wave: new information from old data”という著者らのテーマに的を合わせたようなセッションが設けられ、全6演題中2題を発表でき、日頃の地道な努力が多少なりとも報われた感があった。

【企業展示】広大な2つの会場で主要企業が所狭しと展示を行っていた。新しい薬物、特にスタチン系とARB系薬物の巨大な看板が印象的であった。あるブースで配布されたCD-ROMは、アブストラクト検索が可能で検索結果を図を含めたRTF形式で保存でき、のちのち役に立った。別にHighlight CD-ROMが有償で購入できたが、会期後もWeb購入が可能であり、ヨーロッパまで足を伸ばせない人はこれで最新情報を得るという手もある。

毎年のようにESCは規模が拡大し、より国際化が進み内容も充実してきているようである。前回1998年のウィーンとは異なり、街中ではどこでもユーロが当たり前のように使われていた。非英語圏のヨーロッパ諸国の演者は、数年前に比べて明らかに流暢な英語を話すようになったと感じられた。このように、ヨーロッパ諸国はEU連合を中心に一体となって、今後ますます経済・文化の面で大きな存在になってくることが予想される。一方では、数年前のESCでは、ヨーロッパらしい斬新でオリジナリティー溢れる話題を得ることができるという楽しみがあったが、それがやや薄れつつあるような印象も否めない。今後のESC

に、ESCらしい独自性が保持され続けることを期待しつつ、自らもそれに負けない情報発信がで

きるように努力を続けることを胸に、日本への帰途についた。